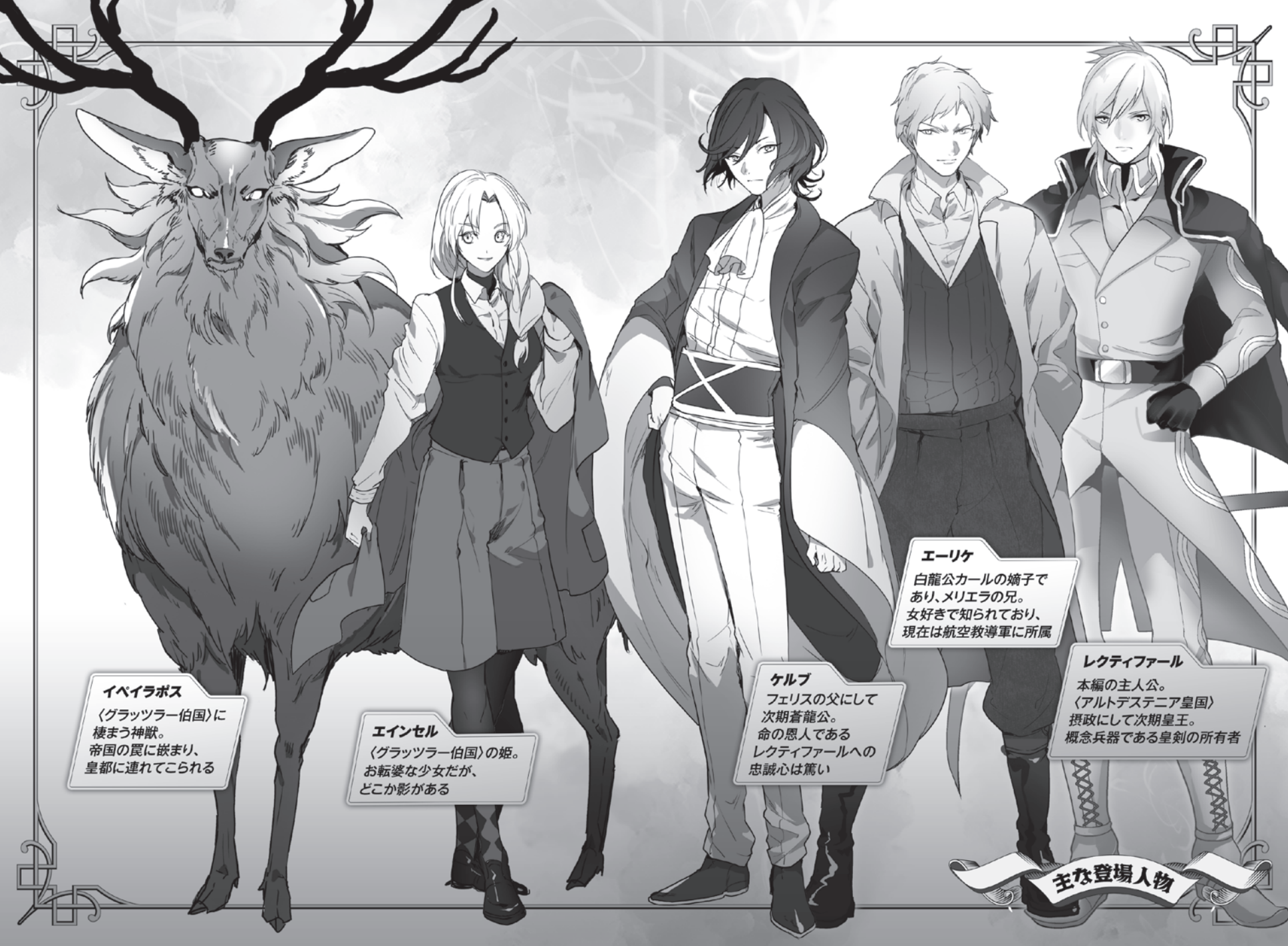


白の皇国物語

16



### イベイラボス

〈グラッツラー伯国〉に  
棲まう神獣。  
帝国の震に嵌まり、  
皇都に連れてこられる

### エインセル

〈グラッツラー伯国〉の姫。  
お転婆な少女だが、  
どこか影がある

### ケルブ

フェリスの父にして  
次期蒼龍公。  
命の恩人である  
レクティファールへの  
忠誠心は篤い

### エーリケ

白龍公カールの嫡子で  
あり、メリエラの兄。  
女好きで知られており、  
現在は航空教導軍に所属

### レクティファール

本編の主人公。  
〈アルトステニア王国〉  
摂政にして次期皇王。  
概念兵器である皇剣の所有者

主な登場人物

|     |               |
|-----|---------------|
|     | 目次            |
| 第一章 | 中立国 9         |
| 第二章 | 宿業 73         |
| 第三章 | かくのごとく愛すべし 99 |
| 第四章 | 神獣強襲 137      |
| 第五章 | 波及 222        |



進め、進め、とくそつたれの上官ががり立てている。

どこへ進めというのか。目の前にあるのは、つい先ほどまで隣で震えていた戦友の骸で、自分はその骸を盾にして銃弾を避けている。

あの上官は、この戦友の身体を足蹴にしても進めというのか、あの地獄へ。

銃弾が飛び交い、砲弾の欠片が吹きすさび、悲鳴が悲鳴を覆い隠し、引き千切られた腸が湯気を上げていてあの地獄へ行けというのか。

あんなちっぽけな鋭剣の指し示す先、あんなひよろひよろした貴族の息子の命令に従って突き進めというのか。

こんなくだらない戦いを始めたのは誰だ？

ろくでもない貴族が、ろくでもない法を盾に、ろくでもない暴虐を働いたからではないのか？

俺たちが何故、他人の不始末を取り繕わなければならない。

不始末の報いを受けるのは、あのうるさい士官ではないのか。

俺は、目の前の戦友に問い掛ける。

なにも言えぬ戦友は、遙か遠くの未来を見つめているかのように見えた。

そうだ、こいつは戦わずに済む場所に行ったのだ。

俺もまた、あのくそつたれをぶちのめして同じ場所へ行くのだ。

俺はそつと、旋条銃ライフルの狙いを横に向けた。

隣にいた別の戦友が驚いたような顔をしたが、すぐに目を逸らす。誰もが、自分以外の誰かがそうしてくれることを願っていたのだ。

俺は、口の中でくそつたれと言いながら引き金を絞しぼった。

——皇国暦一三〇三年刊行 『中原傭兵物語』冒頭より抜粋

## 第一章 中立国

小国乱立のアルマダ大陸中原にあつて、その国は一際ひとまわ小さな国だった。

〈グラツラー伯国〉——古い時代にこの地の領主として封じられた伯爵はくしやが、時流に乗って独立し、国主となった国だ。

一時期国王を自称することもあったが、結局は名乗るだけの名分がある伯爵という肩書きに落ち着いた。

しかし、国を支えるほどの基幹産業はなく、農業などで食いつなぎながら、各国家の間を水上の木の葉のように漂うことで独立を維持してきた。

あえて他国が侵略するほどの価値を持たないことで国を保ってきたのである。

「ふわあ……あ」

その伯都の城壁の上に、ひとりの少女がいる。

黄白色の髪を三つ編みにまとめて一本背後に垂らし、綿の襯衣しんいに羊皮ようひの上衣と、膝上丈の娘袴むすめかま以外

はまるで少年のような出で立ちだ。そういった格好もあってか、年齢的にも肉体的にも大人と言っている彼女なのだが、どこか子どもっぽさが残っている。

少女は街を囲む城壁の縁に寝転び、上空を旋回する高原鷲を眺めつつ、街の商店で買い求めた林檎をかじった。

「あー、いい天気」

その言葉通り、今日の伯都の天気はこの季節には珍しいほど暖かった。いつもならこの時期は雪に閉ざされる直前で、少女が着ているような薄着ではとうてい外出できなかっただろう。

「今日は一日ここで寝てようかなあ」

眩しい日差しを受けながら、彼女はぼんやりと空を見る。

それが正しいことのように思えるほど、この日の陽気は貴重なものだった。

「おいおい、姫さん、勘弁してくれよ」

ガチャガチャと金属が擦れ合う音を立てて姿を見せたのは、伯都の警備を請け負っているガイエンルツヴィテ傭兵だ。

四人組の傭兵たちは、自分らの仕事場に現れた少女を見て、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべている。

「ここは一応、一般人立入禁止なんだぜ？」

もともと年嵩の男が、装甲靴で城壁を踏み付けながら言えば、少女は男たちを焦らすようにゆっくりと起き上がり、ぐっと伸びをした。

「大丈夫だって、わたし一応お姫様だもん。きつとなんとかなるよ」

「ならねえよ！ ていうか、兵団本部からあんたを見付けろって連絡きてんだよ！ さつさと城に戻っちゃくれませんかねえ!?」

ここにいるな、迷惑だ、と全身で訴える傭兵に、少女はにこりと朗らかな笑みを浮かべる。

笑顔に一瞬毒気を抜かれた傭兵たちだが、少女がその一瞬の隙に城壁の縁から姿を消したのを見て顔色を変えた。

「おいしいっ!?」

慌てて城壁の縁に駆け寄った彼らは、眼下六メートルほど、城壁のすぐ内側に展開された通信用伝纜の上に立つ少女の姿を見付ける。

少女は親指ほどの太さの伝纜の上で傭兵たちを振り返ると、そのまま市街地の方角へと走っていつてしまった。

「——隊長、どうすんです？ 見付けたって連絡しますか？」

「そんなことできるわけやねえだろ！ あの姫さんがどこに行つたのかも分からねえってのに……」  
ですよね、と肩を竦める部下の脳天に拳骨を落とし、「隊長」は大きな溜息を零した。

「はあ、さつさとどつかに嫁に行ってくれねえかな。俺たちや傭兵であつて学校の先公じゃねえんだしよ」

「いてて……。そういや、あの傭兵は本当なんですかねえ」  
頭を押さえながら部下が言った言葉に、彼は反応する。

「ああ、あの話か……」

『噂』——大陸の半分を支配する大陸安全保障会議、その主導的立場にある東の大国〈アルトデステニア皇国〉と、この〈グラッツラー伯国〉の政府が活発に接触している。そういった話が、同僚の間で広まっていることを傭兵は知っていた。

そもそも傭兵というものは、政治にも鼻が利かなければ生き残れない。特に部隊を指揮する者ともなれば、ただ命令通りに戦えばいいわけではないのだ。

それに、派遣された先での情報収集は、本国の兵団本部から命じられた重要な任務であり、自分たちが得た情報が同じガイエンルツヴィテ傭兵の生死を左右するかもしれないことを、彼は良く理解していた。

〈ガイエンルツヴィテ〉が、決して優れた産業とは言えない傭兵の輸出を続けている理由のひとつが、対外諜報の大半を各地に派遣した傭兵部隊に頼っているという現状にあった。

各国の大使館や公使館に派遣されている駐在武官と並び、ガイエンルツヴィテ諜報の一角を担う彼

らが、情報に疎いはずがないのである。従つてこの噂も根拠がある——いや、事実と言い切つていいものだった。

「〈ヴィレー〉に行つてゐる連中も、最近は暇らしいからな。直接殴り合う時期じゃないだろうさ。

俺らも同郷人同士で殺し合わなくて済むんだし、いいことじゃねえか」

「そうなんですけどね。うちの親父が、こりゃ食いつぶれるかもしれないって言つてたもんで……」

皇国の動きに同調したわけではないだろうが、帝国政府もまた各国への圧力を強めている。帝国陣営の切り崩しを図る皇国と、それを防ごうとする帝国という構図だ。

皇国が行う大陸安全保障会議参加国への援助は、裏に自国の経済圏を拡大させる目的があるにせよ、財政的に危うい国にとっては救いである。

そうでない国にとつても、自国民への利益供与という側面があり、決して不都合ばかりではない。

「傭兵なんて食いつぶれた方が世のため人のためなのさ。そこらの衛兵にでもされる程度なら、親兄弟が殺し合うこともないし、稼ぎ手がいなくなった家がバラバラになることもないんだからよ」

これまで大陸は常に戦乱の中にあつた。その中で彼らの先祖は戦い、倒れてきたのだ。それしか生きる方法がなかったとしても、彼らとて喜んで受け入れてきたわけではない。

彼らも、畑を耕し、家畜を育て、工芸品を作り、物を商つて暮らせるのなら、それを生業として生きていきたいと思つていた。

ただ、徐々に状況は変わってきた。かつてのように「傭兵だけが生きる術」でもない。今の時代ならば、傭兵以外にも産業を興せるだろう。

「——これも時代の流れってやつだ。お前らは若いんだから、もうちよつと頭を使ってこれからのことを考えな」

「ういーっす」

部下の気の抜けた返事を聞きながら、傭兵隊長は再び見廻りに戻る。

すでに少女の姿は街の中に消え去り、それを再び捉えることは不可能になっていた。

「一応、『姿を見た』くらいは報告しとくかね……」

そうして彼は通信機の開閉器を押し込み、疲れ切った表情で告げる。

「こちら外周警備の七分隊、エインセル姫が城壁から市街地方面へ逃げていった。どうぞ」

〈本部了解。引き続き警戒任務を続行せよ。送れ〉

「了解。七分隊は任務を継続する。通信終わり」

はあ、と深く溜息を吐くと、彼は愛用の鉾を肩に担いで城壁の上を歩きはじめた。

遠くに見える山々は雪化粧で白く染まり、厳しい冬への準備を人々に求める。

それはいつも通りの光景で、彼もまたいつも通りの冬がやってくると無意識のうちに思い込んでいた。これが思い違いであったと気付くのは、まだもう少し先のことである。



城壁から街中へと移動したエインセルは、飲食店が並ぶ一角に移動していた。

そこには彼女が前々から目を付けていた料理屋がある。各種動物の肉を様々な料理に加工し、販売している店だ。

食べ歩き用の手軽なものから、会食の主役を務める丸焼き肉まで、幅広く取り揃えている。

「おじさん、なんか食べ物ちよーだい！」

店先から聞こえてくる声に、店主は天火に向けていた目をぎょろりと移動させた。

羊肉から落ちる脂が、加熱された料理用の無煙炭に落下し、じゅうじゅうと音を立てた。

「——うちにあるもんはみんな売りもんだ。くれてやるわけにはいかねえな」

「えー、おじさんのところの串焼き美味しいのに……」

「だったら金を出せ」

天火の隣にある網焼き炉の上で、木串に刺した牛や豚の肉をひっくり返ししながら、店主は少女に言う。

「お城にツケておいてよ」

ぬけぬけとそう宣<sup>のたま</sup>うエインセルの表情には、一片の躊躇<sup>ためら</sup>いもない。心の底から城に請求しろと言っている。

それは姫君らしい世間知らずから来るものではなく、彼女生来<sup>せいらい</sup>の性格ゆえだった。

「うちのツケは酒を飲む常連だけだ。お嬢ちゃんには早い」

ぶうと頬<sup>ほ</sup>を膨<sup>ふく</sup>らませ、少女は店先にある長椅子に座る。

そのまま足をばたつかせつつ、店主に懇願した。

「味見だけでいいからさー。わたし、結構味にはうるさいよ?」

「オレは他人の舌より自分の舌を信用する。人に味を見てもらう必要はねえな」

「うう……そういう職人気質なところがいいんだけどね。もうちょっと愛想良くしないとお店流行<sup>はや</sup>らないよ?」

何とか焼き立ての串焼きを手に入れようと、少女は全力を尽くす。

その方向性が微妙に意地汚いのは、いったい誰の教育のせいだろうか、と店主は思った。

(城の食事はそんなにまずいのか?)

少女が城下の飲食店で同じように食べ物を分けてもらっていることを、店主は商店主の寄り合いの中で聞き及んでいた。

他の店主たちは市井<sup>しせい</sup>の味が恋しいのだろうと野良猫<sup>のらねこ</sup>に餌<sup>えさ</sup>を分け与えるような心境で試食を許してい

るらしいが、彼は違った。

(こいつ、単に食い意地張ってるだけじゃねえかな……)

「おい、エインセルよ」

「なに? くれるの!？」

それ見たことか、と店主は思った。

長椅子から身を乗り出し、食い意地に輝く目でこちらを見ているこの国の姫。どこからどう見ても、市井<sup>しせい</sup>の味に焦<sup>こ</sup>がれる深窓<sup>しんそう</sup>の姫君ではなく、我が物顔で人の昼食を奪おうとする野良猫<sup>のらねこ</sup>だ。

それも、見た目だけは血統書付きの舶来種の猫である。

「——金を出せと言ったぞ。一応、焼き立てができたから教えてやっただけだ」

「くう……っ、ほのかに漂<sup>ひら</sup>つてくる肉汁とタレが織りなす交響曲! あああ……今月のお小遣いよ……さようなら!!」

エインセルが勢いよく懐<sup>ふく</sup>から出した硬貨を数え、店主は三本の串焼きを差し出す。

それぞれ、豚と鶏<sup>とり</sup>と羊の肉を特製の合わせ調味料につけ込み、炭火でじっくりと焼き上げた代物<sup>しろもの</sup>だ。もともと、保存食用の塩漬け肉の調理法として考案されただけあって、合わせ調味料の味付けは少し濃い。

「麦<sup>バシ</sup>麺がほしい……」



「そこにあるぞ。銅貨三枚な」

「持ってけ泥棒！ うわーん！ 美味しいよう……！」

銅貨を投げ付け、店の会計棚の横に置かれていた藤籠とうかごからこれまた焼き立ての麦麵パンを手にとると、エインセルはそれを二つに割って、中に串から外した肉を挟み込む。

あとは、思い切りかぶり付くだけだ。

「はあ……しゃーわせである……もうしんでもいい」

「死ぬなら別のところで死んでくれ。うちで死なれたら迷惑だ」

姫殺しの汚名ほど面倒なものはない。

店主は、焼き上がった串を火の勢いが弱い網の端に寄せ、新たな串を網の上に並べていく。

網が串で埋まった頃、小さな声が聞こえた。

「——死なないよ、わたしは」

店先より聞こえてきた声に、店主ははっと顔を上げる。

長椅子から立ち上がったエインセルが身体を解ほしながら、寂しげに街を眺めていた。

「誰だって死ぬだろう」

店主は少し慌あわてるように言った。

しかし、エインセルはその言葉にはのかな苦笑を浮かべるだけで、否定も肯定もしなかった。

「ごちそうさま。また来るね」

最後にそう呟くと、エインセルは街の雑踏の中へと消えていく。

店主はしばらくその姿を探していたが、串焼きが焦げる匂いで我に返る。危うく商品を黒焦げにしてしまうところだった。

「小娘がなんて顔しやがる。やっぱり貴族ってのはろくでもねえな」

自らの行く末を見つめ、それを受容するのは、大人だけでいい。自分の終わりを知るのは、できるだけ遅い方がいい。

彼は調味料の入った壺に串を浸しつつ、貴族に生まれなくて良かったと心の底から安堵した。



『閣僚』は、皇国の政治体系の中で非常に曖昧な立場にある。

国政のあらゆる権限が皇王に集められているため、彼らは常に代理人という立場を強いられるからだ。

自分たちが持っている権限が仮初めのものであることを、どうしても受け入れられない者は少なくない。特に、『閣僚』となる政治の中心近くに己の才覚で上り詰めた者たちにとって、その才覚が及

ばないものがあるという現実こそがなによりも受け入れがたいのだ。

「――殿下が望まれたことである、ということは理解しておりますが、これほどの大事に我ら外務院が蚊帳の外に置かれていることがまず納得しがたい」

皇城の政府区画、『鐵の間』と呼ばれる窓のない会議室で、外務院総裁マルファスが机を叩く。

三総裁会合と呼ばれる定期会合のことだ。

「我らがことを知るのには総てが決まってから――事後処理のために人員を派遣することが我々の職務ではありません」

「気持ちには理解できる。我らも似たようなものだ」

岩窟小人の老人――ガールランドが、肩を揺らしながら笑う。

閣僚の中ではかなりの古株であり、それだけに『皇王の権力』との付き合い方もよく知っていた。軍官僚として一〇〇年以上、皇王家に仕えている人物だ。少なくともマルファスよりは現実を知っていた。

「あの方々は我々に悪意を持っているわけではない。ただ、そうさな、我々を子どものように見ているのは確かだ」

「……丁稚のように扱われるならば、我々もまだ納得できる。そのために我らはいのだからな。店先を箒で清めることも、仕事のうちだ」

マルファスの不満げな声音に、内務院総裁ルイゼンが頭を振る。

機族の出身であり、先代皇王の妃を姉に持つ男だ。彼は神経質そうに眼鏡の位置を直すと、マルファスに向き直る。

「ならばそう言えがいい。幸い、今の殿下は話を通じる御方だ。もっと仕事をくれと言えば、そなたらが望むように仕事を分け与えてくださるだろう」

「子どもが菓子を強請るように……か？」

冷え切ったマルファスの声。それに対するルイゼンの言葉もまた、凍土のごとき硬さと冷たさを持っていた。

「そなたが言っているのはそういうことだ。そもそも、外務院が情けないからこそ、殿下御自らこの話を纏めたのではないか」

大陸安全保障会議の構想は本来、先代皇王が外務院に諮ったものだ。外務院はそれ以来、院内に準備部署を作り、如何にしてそれを実現するかを密かに研究し続けていた。

それがあつたからこそ短期間で大陸安全保障会議が形になったとも言えるが、今現在の保障会議と、かつて先代皇王と外務院が研究していたものとは、名前こそ同じだが内容はほとんど別物と言つてよかった。

「先代陛下のお考えになった大陸安全保障会議は、軍縮のための機関。間違つても軍事同盟などでは

なかった」

「それが不満か？」

ルイゼンは呆れたようにマルファスを見る。

「不満ではない。我々が構想していた大陸安全保障会議は、今の状況ではなんの力も発揮しなかっただろう。むしろ、我々が培ってきた各国との連絡手段が役に立っただけでも僥倖だった」

先代皇王が求めた大陸安全保障会議は、各国の利害を国際会議の場で調整するためのものだった。

軍事的衝突が発生する前に話し合いで決着を付けることができれば、天井知らずに上昇している各国の軍事費を削減することができる。それらの予算が内政に回れば、そもそも外部に富を求める必要性も薄まる——先代皇王はそう考えた。

「先代陛下の考えは間違つていなかった。我国は延々と戦い続けてきた。そして、それが当たり前になつていた。そんな状況を少しでも改善するには、利害関係を共有するしかなかった……」

マルファスは、その構想に帝国の帝王すら前向きな姿勢を示していたことを知っている。

国内の情勢が不安定になりつつあった帝国にとっても、軍事費の圧縮を可能とする大陸安全保障会議という対話機構は有用だった。

これが頓挫したのは、先代皇王が政務を執り行えないほど衰弱してしまったからだ。当時、次代の皇王となる皇太子はおらず、そのことを根拠に誰もが先代皇王の治世はまだまだ続くものと思つて

いた。

すくなくともそれまでの皇国の歴史では、皇太子がいけない状態で皇王が崩御することなどなかったからだ。

一年足らずのわずかな治世となった第三代皇王エリザベータにしても、彼女の即位直後に第四代皇王となる皇太子が選出されていた。

先代皇王の不<sup>ふ</sup>予<sup>よ</sup>は、大陸安全保障会議構想を闇の中に追いやり、結局は旧来の軍勢力を前面に押し出した外交が展開されることになった。

「先代陛下は……」

マルファスはそこで一度言葉を切った。

自分の発言は、果たして三総裁会合に相<sup>ふ</sup>応<sup>お</sup>しいかと考え、だが自らの本心を晒<sup>さら</sup>すことは一廷臣として当然のことであると結論付けた。

「今の我国をどう見ると思う？」

先代皇王がなぜあそこまで対話による平穏を求めていたのかは分からない。しかし、当時の大陸情勢の中ではそれがもつとも適しているように思えた。

多くの国は戦いに疲れていたし、国民もまた安定した生活を求めている。そうした世論を背景に、多くの国が対話による平和を考えはじめていたのだ。

無論、そのために越えなければならない障害は少なくなかった。各国には戦争継続を当然のものとして考えている人々が相当数存在したし、皇国もそれは変わらなかった。

皇国が、ある意味で帝国以上の軍事偏重国家だからだ。

国土の総ては軍事要塞<sup>ようさい</sup>となるべく設計され、国内に張り巡らされた鉄路は軍に用いることを前提に選ばれた規格。主要都市はほぼすべてが単独でも軍事要塞であり、国定街道や橋梁<sup>きょうりょう</sup>は重量級の軍事車輛に耐えることができるように作られていたし、必要ならば容易に切断することもできた。

軍事費は国内総生産の一割を切ったことがなく、常に膨<sup>ぼう</sup>大な予算が軍事関連に投入され続けてきたのだ。

そうしなければ国を守れないという考えと、それを許せるだけの経済的余裕が皇国にはあった。

だが総ての国がそうだったわけではない。皇国の軍備に合わせて軍事力を拡張させることは、他国にとって大きな重荷だったのだ。その重荷が対外侵略を是<sup>ぜ</sup>とする風潮を作り、大陸の東方は常に火種を抱えることとなった。

「あのまま上手くいっていればと、今でも思ってしまう。それは罪か？」

マルファスは旧来の大陸安全保障会議の研究に携<sup>たず</sup>わったひとりだ。

この構想が実現すれば、大陸に平和が来ると信じていた。しかし、先代皇王が倒れたことで構想は蹉<sup>さ</sup>跌<sup>てつ</sup>をきたし、同時にマルファスは外務院次官として研究から離れて外交の最前線へ立つことになる。

せめて自分とを考えを同じくする者を外交の責任者にしたいという先代皇王の思惑もあったのだろうが、マルファスひとりではどうにかできるほど大陸の情勢は安定したものではなかった。

「先代陛下が倒れ、すぐに帝国は動き出した。それはワシがよく知っておるよ。何せ、軍務院の北方総局にいたからの」

ガーランドは当時、〈ヘイルマグス〉にある軍務院の北方総局の局長だった。軍務院の副総裁職を兼任し、すでに軍務院の総裁職を内示されていた頃でもある。

皇王不<sup>ふ</sup>予<sup>よ</sup>と同時に動き出した帝国やその従属国の動きを警戒し、北方総軍総司令官と毎日のように情報交換をしていた。

「どうしようもないと思ったよ、君たちには悪いがね。帝国はすでに帝王の権力で抑えきれん状態ではなかった」

帝王は巨大な権力を持っていたが、彼が抑えられるのはあくまで政府や軍の主流派だけだったのだ。地方の軍閥や従属国は自分たちに課せられる軍事費に喘<sup>あえ</sup>いでいた。結果、危機感を煽<sup>あお</sup>つた上で軍事費確保の名目で様々なところから金を集めて自分たちの立場を維持するようになった。今更戦<sup>いません</sup>いを終わらせろと言われたところで、はいそうですかと頷<sup>うなず</sup>くはずもない。

「それでも、時間を掛ければ上手くいったのかもしれない。少しずつ地方の反発を削<sup>そ</sup>ぎ落としていけば、穩当に大陸の平和を手に入れることができた可能性はある」

だが、それは所詮夢に過ぎない。

彼らが過去をどのように捉えていようと、今まきに行われている大陸各地の争いを収めることはできないのだから。

「当時の伝<sup>つて</sup>手が役に立っただけ、良かったと思うべきだろう。西域は言わずもがなだが、中原もあの頃から変わらず揉<sup>も</sup>め事が絶えないんだ」

ルイゼンが手元に置いてあった資料を投げると、マルファスはそれを嫌な顔を浮かべながら受け取った。

本来ならば外務院が手にしているべき資料を、内務院が先に入手していることが気に入らなかった。

「また、我々の職分を……」

「貴様らが情けないからだ。うちも暇じゃないんだぞ」

内務院の情報機関の最たる仕事は、国内での防諜と情報収集だ。国外の情勢を調べるのは基本的に軍や外務院の仕事である。しかし、防諜を十全に行うためには国外の情勢にも精通していなくてはならない。

従って、内務院も国外に様々な諜報網<sup>ちやうほうもう</sup>を構築しており、時折軍や外務院を出し抜いてしまうこともあった。

「まあいいじゃないか。同じ情報を複数の経路から分析するのは基本だろう」

幾つもの情報機関が並立する目的はそこにある。

それぞれに得意分野を持たせ、さらに多角的に情報を分析するためには、そうした体制がもつとも優れている。

予算不足などでほとんど情報機関を持たない中小国に比べ、皇国はこうした部分でも大きく先んじていた。

「——情報交換は、あとで申し入れを行う」

「なるべく早く頼むぞ。連邦の役所のように一カ月も待たされては敵わん」

西方の民主国家群との様々なやりとりの際、意思決定の速度に大きな差があるせいで苦勞させられるのは、外務院も内務院も同じだ。彼らは、自分たちの国がおよそ考えられないほど素早い意思決定が行われているとは思っておらず、民主国家群のそれが遅いのだと認識している。

「わかつている。——しかし、これはなんとも酷いものだ」

マルファスは資料を開き、そこに記されている内容に眉を顰めた。

「あの峻嶒な土地で生きるのはさぞ辛かろうが、よく飽きもせず何百年も戦争を続けていられるものだ」

そんなマルファスの感想に、ガーランドがくく、と喉を鳴らした。

なにを笑うことがあるのかと不満げなマルファスに、ガーランドは緩く頭を振った。

「彼らは戦争をしているのではなく、戦争ごっこをしているのだよ。中には真剣に命の取り合いをしている国もあるが、大半は身内同士で示し合わせたいざこざを起こし、それを大袈裟に吹聴しているだけだ」

ガーランドの言った通り、両陣営の戦死者は驚くほど少ない。

幾ら小競り合いとはいえ、まったく死者が出ていない戦場もあった。

「しかし、ここ最近はその動きが変わりつつある」

ルイゼンは会議卓の上の釦を押し込み、虚空に投影窓を開いた。

そこに映っていたのは、各国の軍部隊の動きだ。

「帝国側の軍備が増強されている。しかも、かなり巧妙に隠蔽を施した上でのことだ」

「穏やかじゃないな」

マルファスは軍事全般に関して言えば、国内の学校で当たり前のように施される基本的な軍事教練——非常時に取るべき行動や、その理由などを教える——しか受けていない。外交官を目指していたこともあり、学友たちが将来を見据えて予備士官課程を受けているときも、それに見向きもしなかったのだ。

予備士官課程を経て実際に予備士官に任官されると、その学生は軍籍を得る。年に何度か軍の呼集を受けて教練に参加し、最終的には予備大尉まで昇進することができた。

ただ、皇国において予備士官が実際に招集された例はない。

いずれの軍も士官が不足するという事態に見舞われたことがないためだ。そもそも、本土が戦場となり、それ以前の段階で部隊を率いるべき士官が多数失われた場合の補充というのが、予備士官制度のもっとも大きな目的である。そのような事態が起きていないならば、予備士官たちの活躍の場が生じるはずもなかった。

ただ、予備士官は軍を相手にする様々な商会や、軍が一部の株式を保有している鉄道会社、貴族軍などで重宝されていたから、仕事を求める過程で予備士官となる学生たちが少なくないのだ。

「そう、穏やかじゃない。殿下の大陸安全保障会議も、突然の思いつきで作られたわけじゃないということさ」

そう言われると、マルファスは黙るしかない。

「それに、あまり不満そうな顔をしていると、外務院の中にいる殿下嫌いの連中に、仲間だと思われるぞ？」

「あいつらの仲間!? 冗談はよしてくれ!」

心の底から嫌がついているであろう吸精種の青年の声に、ガーランドとルイゼンは顔を見合わせた。

殿下嫌いの連中——どこにでも一定数存在する反皇王派の官僚たちだ。

彼らは自分たちの持つ権力が借り物であることに不満を抱き、常に水面下で動き回っている。

彼らがその思想に染まった理由は様々で、外国の価値観に染まったり、師事した教育者がそうした思想に染まっていたり、あるいはそうした家系に生まれたため、ということもあった。

彼らの特徴は、反皇王派と呼ばれながらも、皇王自体を害する意図を持っていないことだ。あくまで皇国の民として皇王を敬い、しかし自分たちの力をより大きく振りたいと思っているに過ぎない。だからこそ、彼らは放置されている。組織の思想が硬直することは組織そのものの機能低下を招く。それがどれほど権力者にとって不都合であろうとも、法に則している限り弾圧するべきではない。

しかし、これはあくまで皇王の考えだ。各官庁にとってみれば、それらの集団はこの上なく面倒な存在である。

「そんなにいやなのか？ 彼らとて、別段反政府運動にかまけているわけではあるまい」

「むしろそうであれば良かった。警務隊を差し向けて逮捕できる」

「何かいやなことでもあったのかね？ 普段の君らしくもない」

ガーランドが問うと、マルファスは革椅子に深々と腰を落として深い溜息を吐いた。この会議室の椅子は長時間の会議に耐えられるよう、魔導技術の粋を凝らして作られている。

その気になれば椅子の上で暮らせると豪語する者がいるほど、座り心地のいい椅子なのだ。しかしそんな椅子も、マルファスの心を癒やしてはくれない。

「色々不満を持っていることは分かっているんだ。殿下が摂政となられてからこちら、外務院はいい

ところがない。ほとんどがあの方のおつかいをするだけで、以前のように我々が考案した方策を皇王陛下に上奏し、認めてもらうということができていないんだ……」

ああ、とふたりは同情そのものといった眼差しをマルファスに向けた。そもそものはじめからして、外務院には逆風が吹いていた。

あの内乱の際、連合軍と戦い、後に対話によって決着を付けたのは、レクティファールだった。

外務院と言え、各国に撤兵を呼び掛け続けていたのだが、彼らの権限を保障する政府が存在しない状況では、各国が彼らの言葉に耳を傾けるはずもない。

それでも諦めずに中立国などに仲介を依頼し、イズモをはじめ、いくつかの国から色よい返事を貰ったところで、レクティファールが現れた。

外務院がこつこつと積み上げてきた施策は、レクティファールなる存在の前には露ほどの役にも立たなかった。結局はレクティファールの意思こそが皇国の意思ということになり、各国もまたそれを受け入れた。

外務院がようやく本格的に仕事を再開したのは、連合軍の円滑な撤退のための打ち合わせからである。

「我らは、おそらく一番あの方の恐ろしさを知っている。自分たちが地道な努力によって積み重ねてきたものが、あの方の意思ひとつで無価値になるという経験は……その……あまり好ましいものではない」

ない」

さもあらん、とふたりは思う。

外務院の中で反皇王派が力を持つ理由も理解できた。

三院の中でもっともレクティファールの行動による被害を受けてきたせいで、反発もまた大きいのだ。

「物わりのいい連中は、あの状況下では仕方がないことだったのだと分かっている。しかし、そうじゃない連中は、自分たちの仕事が直接政府に握られるのではないかと恐れているんだ……」

官僚たちは、血の滲むような努力の末にその立場にある。

皇国の官庁は常に多くの仕事を抱えており、余剰人員は許されない。

馴れ合いなどもつてのほか、どれだけ官庁内で栄達しようとも、職務に反したと判断されれば簡単に放逐される。

そうした環境の中で鍛え上げられた者たちが、唯々諾々と上役の指示だけを聞いているわけがない。彼らは常に自分の能力を十全に発揮させることを求められてきたし、自らも欲してきた。だから、自分でそういった環境を作り出す努力も怠ることはない。

それが分かっていることもあり、反皇王派であろうと誰も放り出そうとはしない。反骨じみた態度は、向上心の表れであるし、有能さの証でもあった。

「まあ、お前がその最たる一例であるしな」

ガーランドが呟くと、マルファスはさらに小さくなる。

「誰か、総裁候補を見繕<sup>みづろ</sup>って上奏<sup>じやうそう</sup>すれば良い。お前に総裁は無理だ」  
ルイゼンは本心からそう忠告する。

彼自身、そろそろ後進に道を譲ってもいいと思っていた。彼は元々、病に倒れた先代内務院総裁の代理として副総裁からの繰り上がりで総裁になった人物で、組織の長<sup>おそ</sup>としては未熟な部分が多い。それでも職分を果たしてられるのは、内務院という組織が三院の中で最も大きく、総裁を補佐するための体制が整っているからだ。

泰然としたその組織はあの内乱でも揺らぐことなく、皇都以外の都市での混乱を最小限に抑えることができたのだった。

「もうやった。しかし、あまり総裁の交代が頻<sup>ひん</sup>繁<sup>はん</sup>だと、諸外国からの信頼が揺らぐと言われてな……」

「それはまたこの上ない正論であるな。さすが殿下とお褒<sup>ほ</sup>めするべきか」

ガーランドが低い笑い声を上げると、ルイゼンは自分のことではないにも拘<sup>か</sup>わらず不機嫌になった。おそらく自分が同じように申し出ても、やはり同じような返答があるのだろうと半ば確信した。内務院総裁は国民の生活を守る立場にある。つまり、国民の信頼を損なうような真似<sup>まね</sup>はできないということだ。

すでに一度、病による総裁の交代という不手際を見せてしまった以上、ルイゼンの交替は誰もが納得できる状況でなければならない。

そういった状況を作るのは、彼からしても簡単ではないように思えた。

「まあよい。今論ずるべきは中原の情勢だろう。あの辺りは大昔から争いが絶えなかったゆえ、惰性<sup>だせい</sup>で争っているという面もある」

「何とも迷惑なことだ」

ルイゼンが吐<sup>は</sup>き捨てた言葉は、そのまま三人の本心だった。

「しかしそんな中原でも、大陸安全保障会議に参加している国もあれば、参加に意欲的な国もある」  
マルファスが言う。

そして、手元の制御卓<sup>た</sup>を叩いて中原の地図を表示し、いくつかの国を点滅させた。

「これが現在大陸安全保障会議に参加している国。また……」

さらなる操作により、点滅していた国は点灯へ変わり、別の国々が点滅する。

「これらが参加を希望している国……そういうことだな？」

「ああ、我々の調査ではそのような結果になっている」

マルファスの問いにルイゼンが頷<sup>うなづ</sup>き、三人は投影窓を見上げる。

その中にある小さな国が、ガーランドの興味を惹いた。

「ヘグラッツラー伯国」か。珍しいこともあるものだ。あの国は徹底して国と国の間を渡り歩き、特定の陣営につかないことで生き延びてきたはずだが……」

「情勢が許さなくなってきたということだ。ガーランド翁」

ルイゼンが手を振ると、投影窓が拡大され、件の「ヘグラッツラー伯国」が大映しになった。

「もともとこの国は産業と呼べるようなものはほとんど持っていない。今でこそ金融業でそこそこ名が知られているが、地力のなさがそうさせているに過ぎない」

伯爵国という名前を持ちながら、それを封じた国はすでない。

大陸のほぼ中心という立地にありながら、立地を生かすには国土はあまりに峻嶒であり、土地が養える国民の数は多くなく、自国を防衛する軍事力を贖うには心許ない。

かつては武装中立という選択肢が議論されることもあったようだが、結局は軍事力を整備する前に他国の侵略を受けると判断された。

ならば徹底的に他国の間を渡り歩き、自分たちと戦うことが相手にとつて損にしかならないという条件を整える。最終的に、それが彼らの生存方法となった。

だがそこへ至るのは、決して平坦な道ではなかった。

常に戦乱が起きている中原にあつて、彼らのような小国が生き残るのは容易いことではない。場合によっては争いを裏で操るようなことも行ってきた。

「彼らは帝国と敵対することを選ぶつもりかね？」

髭をしごく岩窟小人の老人が疑問に思うのも無理はない。「ヘグラッツラー伯国」の立地は帝国陣営とされる中原国家に近い。間にあるのは同じ小国で、周辺の国々と同盟を組んで辛うじて独立を維持しているような国ばかりだった。

「あの辺りは、確か帝国の第三皇子が執心だっただろう？ 小国が必死に抵抗しているのを見て楽しんでるのではないかと思つたこともあるが……」

ルイゼンは悪趣味なことだと内心で零しつつ、マルファスの顔を見る。

彼の同僚は頷き、再び制御卓を操作した。

「これが、帝国陣営と目される国だ」

明確に旗幟を示していない国の中にも、当然帝国に靡いている国がある。

あくまで中立に見せかけているだけであり、帝国と敵対する陣営との貿易などのために、帝国から意図的に中立を維持させられているに過ぎない。

それらの国を通すことで、帝国との間で様々なものが取引されているのだ。

取引されるものとしては、金もあれば生き物もあり、情報もある。

ゆえに中原は、大陸の情報員の一割がそこに集まっているとされる、実質的には紛争地帯だった。

「どうにも、次の戦いは地域紛争では終わりそうもない。当然、彼らも中立を維持することが難しく

なる」

「敵対する二者がいなければ、その間を飛び回することはできない。蝙蝠にとつては死活問題となる」ルイゼンは何度も頷き、懷から取り出した情報端末を制御卓の上に置いた。

自動的に情報が交換され、新たな映像が浮かび上がる。

「おい、これはなんだ？」

それを一瞥したマルファスが、ややげんなりとした表情でルイゼンを見遣る。

投影窓に浮かび上がったのは、華やかで艶やかな衣裳に身を包んだ女性たち——女性と呼ぶには些か年齢が足りない者もいたが——だった。

「見合い写真らしいぞ。いやはや、グラツラー伯爵は実に子沢山であられる」

肩を竦めるルイゼンと、がっくりと肩を落とすマルファス。そして、それを眺めて苦笑するガーランドと、三者三様の姿が展開され、そして意識を引き戻したマルファスによって、再び場は動き出す。

「外務院はまだこの情報を手に入れていないぞ」

「それはそうだ。これはグラツラーに出入りする商人が今朝方手に入れたものだからな」

つまり、確度を検めるよりも先に持ち込まれた情報ということだ。

とはいえ、大きくずれている可能性は低い。兆候だけならば、外務院も掴んでいたからだ。

「確かに以前、殿下の妃候補にグラツラーも手を挙げた。あのときは国内の問題を優先したが、そ

ろそろ再度の申し込みがある頃だ」

婚姻外交というものが一部の国——主に民主国家群など——から批判されていることは間違いない。人を政治の道具として用いることは人道に反すると。

だが、これほどまでに分かりやすく、また効果の高い外交の道具はない。人と人を結ぶことで国と国を結び付けることができるのだから、費用対効果も大いに優れていると言えるだろう。

「それで、外務院は誰を殿下に推挙するつもりなのだ？」

機族の持つ、感情を窺うことのできない瞳に射貫かれ、マルファスは一瞬だけ息を詰まらせた。

そうだ、自分が推挙しなければならないのだ。そんな当たり前のことも忘れていた。

「——まだ正式に打診があつたわけではない。ここで答えることはできかねる」

外務院総裁としてはそう答えるしかない。

様々な調整を行い、ようやく皇太子に推挙することが可能になる。そして、推挙するにも様々な根回しが必要になるのだ。

「これまでの婚儀のように易々とは進むまい。友好国や仮想敵国から迎え入れるより、中立国からの輿入れの方が面倒が多い」

「さもあるうの。時期を間違えればそれだけでグラツラーが減ぶ。輿入れが原因で両陣営が全面戦争に突入するなど考えたくもない」

ガーランドは笑いながらそう言っていたが、目はまったく笑っていないかった。

実際、婚礼が原因で戦争が起きた例は歴史上に存在するのだ。また、この国では国内にも事前に調整を行わなければならない場所がある。

「後宮の説得はどうする？ 近衛に託すのが一番適当であろうが、そのための材料も用意しなければならないまい」

「狎下たちは理が分からぬ方々ではない。説明すれば理解も納得もなさろう。ただ、俺は嫌われる」  
マルファスはごくごく真面目な表情で断言する。

「すでに嫌われているのは確かだが、わざわざ龍の尾を踏み抜くことはしたくない」

マルファスが、というよりも、レクティファールを摂政として遇そうとする者たちはほぼ全員が妃候補に疎んじられていると言っても過言ではない。

彼女たちにとって、レクティファールとは愛すべき男であり、それ以上でもそれ以下でもない。そして、そんな立場こそが彼女たちにこの国が求めたことだった。

「では、周囲から埋めていくしかあるまい」

ガーランドの言葉にふたりが頷く。

これまでと何ら変わらない。まず、妃候補たちの周囲から納得させていくのだ。

説得するための手段は多い方がいいし、嫌われている自分たちよりも近い者たちの言葉の方が正

しく伝わるはずだ。

「では、それぞれ役目を果たすでしょうか」

ルイゼンのその言葉で、三総裁会合は幕を閉じた。



苛烈公エーリケ・フォン・リンドヴルム。

白銀の髪に父譲りの彫りの深い顔立ち。伶俐な双眸は鋭く、それに見据えられた者は心臓を鷲掴みにされたような錯覚を抱いたという。

そんな彼の名は、前半生は皇国の撃墜王として、後半生は白龍公として知られている。二代目白龍公カール・フォン・リンドヴルムの嫡子として生まれ、皇国筆頭貴族であるリンドヴルム公爵家の後継としての教育を受けた。

ただ、その気性は若年の頃のカールとよく似て自由奔放であり、酒と女と賭博をこよなく愛する放蕩者であった。

本人もそれを自覚しており、腹違いの妹が摂政と婚約したと聞いたときは、諸手を叩いて喜んだという。これで自分がいなくとも公爵家は安泰であると――

「いや、めでたいことだわ。ただまあ、予想外だったのはウィリアムまでおんなじ男に引つ掛かったことかねえ」

友人の招きによって久しぶりの皇都に現れたエーリケは、道を行き交う女性たちをその優れた動体視力で観察、選別し、これはと思った女性には積極的に声を掛けていた。

それが女性に対する礼儀であると心から信じ、もはや信仰にさえ近い。

「お嬢さん。この俺に少しだけ時間をいただけませんか？」

皇国随一の美貌と言われる妹と同じように、エーリケもまた非常に整った顔立ちの持ち主である。

しかもただ整っているだけではなく、出自と能力に裏打ちされた自信が全身から漲り、存在そのものに輝きを与えている。

そんな人物に声を掛けられて平静を保てる者は、決して多くない。

皇都に到着してから声をかけた女性はすでに二十名。うち八割から連絡先を入手し、三名とは近いうちに食事をする約束を取り付けていた。

連絡先が記載された用箋を懐に仕舞い込み、エーリケはようやく片付いた妹と妹のような女性について思考を巡らせる。

このまま行き遅れるんじゃないかなあと、内心配していたのだ。

「あの二人を同時に釣り上げるとは……なかなかやるな、義弟」

エーリケの感覚で言えば、あの二人ほど面倒な性格をしている女は珍しい。

片や龍族の女の中でも一等その氣質を色濃く受け継ぐ妹。片やその妹に生涯を捧げ、龍族よりも龍族らしい性格の龍人族。

「うん、オレだったら絶対近つかねえな！」

と、皇国貴族の中でも名うての伊達男が断言するのだから、ある程度彼女たちを知っている男たちの彼女たちに対する評価は推して知るべしである。

ともに並大抵の男では御することはできず、双方外見的にはエーリケの好みであるが、できれば一生関わり合いたくない潔癖さを持っている。

腹違いの妹であるメリエラは、趣味は女と言って憚らないエーリケに会うたびに貴族の何たるかを説き、リンドヴルム公爵家の次期当主としての自覚を持つようにと迫った。

「怒ってる姿は、まあ、義母上に似てたな。怒ってる姿が一番似てるって言ったら、さすがにまずいだろうけどよ」

真面目過ぎる妹に辟易していた彼であるが、その愛情に翳りなどはない。

世界で二人だけの兄妹だ。

龍族である前妻を病で、自らの騎兵でもあった後妻を事故——と言うべきだろう——で喪った父が

新たに妻を娶るとはエーリケも考えていなかった。

もし妻を娶るとしても、おそらく公爵位を後継に譲ってからになるだろう。そういったことは、貴族社会では珍しくない。これまでは立場上娶ることができなかった相手であっても、隠居の身となれば話は変わってくる。

そこまで考えたエーリケの脳裏に、ひとりの女性の姿が浮かび上がってくる。

人食ったような笑みを浮かべ、いつも自分をからかってくる人物だ。

その名を、マリア・ヴィヴィ・レヴィアタンという。

「マリア様も、最近は義弟とは随分仲が良いというし、これはひよつとするとひよつとするかもしれないな」

跡継ぎが戻り、公爵位の継承について摂政からの許可が出たことも一因だろう。

マリアは一度息子への公爵位継承を目前にしてそれを取り止めた過去がある。次こそは、と意気込んでいるのは誰の目にも明らかだった。

自分の義弟となる人物に対する執着心が理由だとすると、これはなかなか面白いことになりそうだった。

「しかし、そう考えるとケルプも面倒な時期に帰ってきたもんだな」

「それでもないぞ、エーリケ」

誰にともなく呟いた言葉に、返答があった。

エーリケはその声に振り返り、相手を確かめると満面の笑みを浮かべた。

「よう、ケルプ！ 久しぶりだな！」

「そうだな、前に顔を合わせてからもう二十三年になるか」

数十年など、龍族の寿命からすれば大した時間ではない。

だが、一度は死んだと思っていた友人との再会は、まるで数百年ぶりに顔を合わせたかのような錯覚をエーリケに抱かせた。

（おいおい、やべえぞ。俺ちよつと泣きそう……！）

エーリケは、自分がこれほどまでに涙もろいとは思っていなかった。

何気なく別れたあの日、ケルプが内心に抱いていた強い決意に気付かなかったことを、彼はずっと後悔していた。

自分が手助けをすれば、もつと“まし”な結末を迎えることができたのではないかと思いつつ続けた。

正直なところ、あの日からエーリケは貴族というものを恨んでいた。

愛する者と想いを交わすことさえ許されないこの国の道理を憎んだ。

そしていつからか、彼はそうしたがらみと関係のない異性ばかりに目を向けるようになった。——もつとも、女漁りは以前より行っていたため、対象が変わったにすぎないが。

さらに言えば、激しさも増した。

父はエーリケに貴族の娘を何人も紹介したが、彼はそれをすべて拒否した。ケルプのようにはなると思っていた。

そんな息子の内心を慮り、カールもまた積極的に息子の相手を探そうとしなかった。時折思い出したように適当な娘を紹介したが、やはりというか、エーリケが受け入れるとは思っていなかったらしく、結局は別の男との間を取り持ち、総ての縁談を成功させていた。

唯一の誤算と言え、ケルプとの関係を知らないメリエラが、エーリケの行動を完全な趣味だと認識したことだろうか。

とはいえ、最初は逃避も含まれていた派手な女漁りも、いつしか本心からの行動になっており、それを考慮すると、メリエラは先見の明があったと言えるのかもしれない。

（妙に勘が鋭いからな、あいつ。——義弟、大丈夫かねえ？）

大丈夫ではない、とここに件の義弟がいれば真顔で答えたことだろう。

だが、今彼の目の前にいたのは、義弟ではなく親友だった。

「変わっていない、ケルプ」

「君こそ、相変わらず趣味は女かい。昔はふざけ半分で、もつとつましやかだったような気がしたが、今は随分と堂に入ったものだね」

喉を鳴らすケルプの物言いに、エーリケは大口を開けて笑い出す。

「それくらいの楽しみは許してもらうさ。どうせ、親父は妹の子どもを後金に据えるだろうしな」

冗談半分に口にした言葉だが、エーリケには存外悪くない案に思えた。大貴族の跡取りとして考えるなら、自分の子よりも妹の子の方が向いているだろう。

自分の子どもが自分に似ない可能性もあるが、自分にはそのような子どもを育て上げる自信はなかった。

「お前は どう思う？ 結構いい案だと思っただが」

「滅多なこととは言うもんじゃない。カール様だって君には期待してるんだ」

「さてな。今の親父が一番期待しているのは、俺じゃなくて殿下さ。なんとと言っても、俺さえ期待してるくらいだからな」

「あはは、殿下の名前を出されると、僕にはなんとも言えないね。あの方には僕の生涯を総て渡しても返しきれない恩があるんだ」

「そんな風に思うなら、少しは女の扱いでも教えてやるといい。誰かが教えないと、とんでもないことになるぜ、あれは」

「そうかな？」

ケルプはそう言っただけ首を傾げる。

